

令和6年度

生活文化に息づく「沖縄空手」調査報告書
～沖縄の風俗慣習・民俗芸能にみる武術的身体表現～



沖縄空手ユネスコ登録推進協議会
(沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課)

発刊のことば



沖縄空手ユネスコ登録推進協議会会長

沖縄県知事 玉城 デニー

はいさい ぐすーよー ちゅーうがなびら

沖縄県では、沖縄空手の精緻な技と平和を希求し礼節を重んじる精神性を次世代に正しく保存・継承するとともに、「空手発祥の地・沖縄」を国内外に広く発信するため、空手関係団体をはじめ、県内の幅広い関係機関・団体と連携し、令和2年8月に「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会」を設置し、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録（以下、「ユネスコ登録」という。）を目指しています。

ユネスコ登録は、世界に誇る沖縄の伝統文化である空手の将来にわたる保存・継承と普及・啓発に寄与するものであり、沖縄空手の価値を県民が再認識する契機となるとともに、空手を通じた交流人口の拡大により、地域社会の発展や世界の平和文化創出にも貢献するものと考えております。

このため、ユネスコ登録に必要な調査・研究として、空手の生活文化としての価値に着目し、同協議会において設置した「学術研究連絡会」において、地域の生活文化に根付いた棒術を含む空手（武術的身体表現）に関する詳細な調査を実施して報告書としてまとめました。

報告書では、棒術を含む空手が県内の地域行事や祭礼行事において盛んに行われるなど、生活文化に溶け込んでいることが分かる内容となっており、地区別の特徴や事例、行事別の特徴、歴史的事例、町道場との関わり、全国との比較などを紹介しています。

本報告書により、沖縄空手が地域社会や県民生活と密接な関わりがあることの学術的な裏付けとなり、ユネスコ登録が推進され、将来にわたり沖縄空手の保存・継承が図られるとともに、文化的価値への理解がさらに深まることを期待しています。

結びに、本報告書の執筆に御尽力いただいた学術研究連絡会の委員・アドバイザーの皆様をはじめ、本調査に御協力を賜りました県内市町村教育委員会や自治会、町道場をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

いっぺー にふえーでーびる

令和 7年 3月

目次

調査概要

1 調査概要	3
2 「武術的身体表現」について	4
3 調査の経過について	4
4 調査報告書の執筆者	6
5 調査票	8
(1) 基礎調査票	8
(2) 調査票	9
6 調査結果総括	10

第1章「武術的身体表現」

第1節 「武術的身体表現」の民俗的事例（寄稿）	14
田楽・田遊び、風流踊、棒踊り、民俗的棒術、獅子舞、小括	
第2節 「武術的身体表現」の歴史的事例	19
1 流派武術と民俗社会	19
2 「武術的身体表現」の実態：神道香取流を事例に	21
3 小括	22

第2章「武術的身体表現」を有する ムラ行事について

第1節 地域の生活文化に根差した武術的 身体表現の歴史的事例	27
第2節 行事別の特徴	33
1 豊年祭	33
(1) 沖縄本島北部	33
(2) 沖縄本島中部	34
(3) 沖縄本島南部	35
(4) 宮古・八重山	37
2 盆行事及び関連行事	39
(1) 北部地区	39
(2) 中部地区	39
(3) 南部地区	40
(4) 宮古・八重山地区	40
3 ハタスガシー・ヌーバレー・イタシキバラ行事	41
(1) ハタスガシー	41
(2) ヌーバレー	42
(3) イタシキバラ	43
4 その他	44
(1) 南ヌ島（フェーヌシマ）	44
(2) シヌグ・ウンジャミと綱引き行事	47
(3) 特別な行事	50

第3節 武術的身体表現を有するムラ行事の総括	52
1 北部地区	52
2 中部地区	56
3 南部地区	62
4 宮古地区	69
5 八重山地区	72

第4節 町道場とムラ行事との関わり	84
1 ムラ行事における空手道場	84
2 八重瀬町志多伯における棒術	86
3 小括	87

第3章 各地区の調査報告（代表事例）

第1節 北部地区	91
第2節 中部地区	103
第3節 南部地区	112
第4節 宮古地区	132
第5節 八重山地区	138

第4章 委員座談会

委員座談会	159
-------	-----

第5章 調査回答結果

第1節 市町村の各行政区（ムラ）所在の 「武術的身体表現」を有する調査 調査地区一覧表	169
第2節 調査地区分布地図	171
第3節 調査回答結果表	172

関係資料	193
------	-----

調查概要

1 調査概要

(1) 調査目的

本調査の目的は、主に地域の生活の営みと密接に関わるものとして「空手や棒術など(武術的身体表現)が、地域行事に根差しており、生活の一部となっている」ことを調査結果として取りまとめ、調査報告書を関係省庁に提出することで、「生活文化」の登録無形文化遺産として認定、その後のユネスコ無形文化遺産登録へつなげていくことである。

また、「武術的身体表現」に関する現状把握とともに、必要に応じて実際に祭事に合わせた現地調査を行うことにより、記録保存と資料の収集に努めることをねらいとしている。

(2) 調査内容

本調査は、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に向けた取り組みの一環として、「武術的身体操作・表現の形態」が継承されてきた多様な民俗文化(生活文化)の現状を把握するための県内全域にわたる調査である。

また、沖縄県域を5ブロック(沖縄本島北部、中部、南部、宮古、八重山)に区分し、各ブロック内の「武術的身体表現」を有する行事等について、詳細な調査を実施する。

(3) 調査手法

令和3年度に基礎調査として、県内各地の集落単位で所在する祭祀や儀礼に継承された「村棒」、豊年祭などの奉納行事に見られる「武に係るまたは武を想起させる」所作を含めて、地域に残る「武術(空手や古武道)」の情報収集を行った上で、県内市町村教育委員会を通じて、各市町村の文化財保護担当等の協力を得ながら、区長や各市町村の文化財保護委員等を調査員として依頼して、集落を単位とする詳細な調査を実施した。

(4) 調査対象

調査票は、地域行事や祭礼行事などにおいて行われる武術的身体操作・表現として、例えば祭事において拝所で行われる空手や古武道(棒やサイ等)の演武や棒術の奉納、豊年祭などにおける棒術の披露、舞踊にみられる空手の舞、空手の型を基にした獅子舞、櫓や槍・サイなどの古武道演武、エイサーの道ジュネーにおける六尺棒、綱引きのガーエーなどに登場する棒術など、様々な場面・内容を対象としている。

(5) 調査項目

調査項目としては、「方言名称」「武術的身体操作・表現の形態」「時期・場所」「行事の目的・由来・伝承」「当該行事における意味」「組織・指導者・伝承方法」「稽古の仕方」「演武構成」「衣装・道具」「音楽」「課題」「記録」に関する28項目となっている。

(6) 調査時期

調査時期としては、令和4年度は5地区34集落、令和5年度は5地区76集落、合計で5地区110集落の調査を実施しており、令和6年度は補足調査や追加調査を実施して、報告書を作成することとしている。

2 「武術的身体表現」について

本調査においては、集落に伝承される空手や棒術などの民俗行事の所作を、「武術的身体表現」と定義して、人々の生活の中で、これら武術的身体表現がどのように根付いているかについての実態を把握することとしている。

3 調査の経過について

(1) 令和2年度の関連した取組

「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会（以下、「協議会」という。）」において、沖縄空手は平和を尊ぶ精神性や地域社会・県民生活と密接な関わりを持つこと等を特徴とし、ユネスコの登録基準に示されている「口承の伝統・表現」、「社会的慣習・儀礼・祭礼行事」、「芸能」等の分野に幅広く該当する無形文化遺産である旨の検討結果が取りまとめられた。

(2) 令和3年度の県内市町村への基礎調査

県内市町村の文化財保護担当者へ協力を依頼して、各市町村で行われている「村棒」や「棒踊」を含む沖縄空手・古武道関係など「武術的身体表現」を有する行事に関する基礎調査を実施して、30市町村から該当がある旨の回答があった。基礎調査においては、「当該行事が行われている集落名」「名称」「起源」「概略」「特徴」「内容」「継承状況」などを照会した。

(3) 令和3年11月22日付けで協議会規則改正

協議会において、ユネスコ登録の構成要素に係る実情を把握するなど、調査研究に係る実施体制の強化を図るため、人類学者・民俗学者を中心とした「学術研究連絡会」を設置した。

(4) 令和3年11月29日、令和3年度第1回学術研究連絡会を開催

沖縄空手のユネスコ登録に向けた令和2年度までの取組状況を踏まえた上で、学術研究連絡会の設置・構成について確認した。また、県内市町村へ照会した武術的身体表現の基礎調査の結果や「マチ道場」の社会的な役割について検討した。

(5) 令和3年12月24日、令和3年度第2回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る実施体制や調査票様式、「マチ道場」の社会的な調査等について検討した。

(6) 令和3年1月28日、令和3年度第3回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る調査票様式（改定案）のほか、「第2回沖縄空手オンラインシンポジウム」について検討した。

(7) 令和4年2月14日、協議会において、「第2回沖縄空手オンラインシンポジウム」を開催

協議会は、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に向けた県民や空手関係者の気運醸成を図るため、登録に向けた取組を紹介するシンポジウムを開催した。パネルディスカッションでは、学術研究連絡会の萩尾委員長、久万田委員、神谷武史委員、田邊アドバイザーがパネリストとして参加し、「武術的身体表現」という視点で民俗行事を事例として紹介した。

(8) 令和4年2月22日、令和3年度第4回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る調査票様式（改定案）のほか、令和3年度に実施した学術研究連絡会の総括、令和4年度の事業計画（案）について検討した。

(9) 令和4年7月7日、令和4年度第1回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る調査票様式や令和4年度の調査計画（調査対象集落や説明会日程）について検討した。

(10) 令和4年7月22日～令和5年3月31日、「武術的身体表現」を有する行事の調査を実施

沖縄県内各地の集落で伝承されている「武術的身体操作・表現」の現状や役割を把握するための調査を実施した。

調査地区：今帰仁村、宜野座村、金武町、読谷村、嘉手納町、北谷町、北中城村、西原町、那覇市、糸満市、八重瀬町、多良間村、竹富町（5地区 34 集落）

なお、宮古島市（8/29）、那覇市（9/13）、宜野座村（9/14）、北中城村（9/15）、竹富町（9/21）、八重瀬町（9/28）では説明会を開催した。

(11) 令和4年12月12日、令和4年度第2回学術研究連絡会を開催

調査に係る調査票の取りまとめ状況の確認や意見交換等を行った。

(12) 令和5年2月13日、協議会において、「第3回沖縄空手オンラインシンポジウム」を開催

協議会は、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に向けた県民や空手関係者の気運醸成を図るため、登録に向けた取組を紹介するシンポジウムを開催した。パネルディスカッションでは、学術研究連絡会の久保田アドバイザーがパネリストとして参加し、無形の文化財の調査研究から見る沖縄空手を紹介した。

(13) 令和5年4月28日～令和6年3月31日

令和4年から引き続き、沖縄県内各地の集落で伝承されている「武術的身体操作・表現」の現状や役割を把握するための調査を実施した。

調査地区：大宜味村、本部町、名護市、伊江村、伊平屋村、伊是名村、宜野湾市、豊見城市、八重瀬町、南城市、南風原町、久米島町、粟国村、宮古島市、石垣市、竹富町、与那国町（5地区 76 集落）

なお、北部地区（4/27）、中南部地区（4/28）では説明会を開催した。

(14) 令和5年5月12日、令和5年度第1回学術研究連絡会を開催

調査に係る調査対象や担当地区、今後のスケジュールについて検討を行った。

(15) 令和5年8月7日、令和5年度第2回学術研究連絡会を開催

調査に係る現地調査の担当地区割り振り、調査報告書構成（案）、今後のスケジュールについての検討、令和4年度調査結果に係る不足項目・必要な追加調査の項目に係る意見交換等を行った。

(16) 令和6年1月12日、令和5年度第3回学術研究連絡会を開催

沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録までの流れや令和5年度調査の回答状況の確認、調査結果に係る不足項目・必要な追加調査の項目に係る意見交換、調査報告書構成（案）の再考等を行った。

(17) 令和6年5月27日、令和6年度第1回学術研究連絡会を開催

調査票の取り扱いと報告書の位置付け、報告書の構成案とスタイル案、年間スケジュール等を検討した。

(18) 令和6年9月10日、令和6年度第2回学術研究連絡会を開催

調査報告書に係る原稿執筆の進捗状況について、各委員からの報告と意見交換を行ったほか、委員座談会の開催や今後のスケジュール等を検討した。

(19) 令和6年12月7日、令和6年度第3回学術研究連絡会(委員座談会)を開催

調査を振り返るとともに、ムラ行事を継承していく上での課題や対応策、希望等について話し合う座談会を開催した。また、報告書(原稿)の取りまとめ状況や今後のスケジュール等の確認を行った。

(20) 令和7年3月6日、令和6年度第4回学術研究連絡会を開催

報告書の作成も含めた3年間の調査についての総括を行い、今後必要な調査等について検討して、今後の方向性について確認を行った。

4 調査報告書の執筆者

本調査の報告書は、「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会 学術研究連絡会」において、調査目的や内容、手法、対象、項目等を協議・決定して、委員やアドバイザー一同が調査や執筆を担当して、まとめたものである。また、本調査のアドバイザーの久保田 裕道 東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長より寄稿いただいた。

○学術研究連絡会委員

萩尾 俊章 沖縄民俗学会 会長

久万田 晋 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 教授

神谷 武史 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽文化専攻沖縄文化コース 講師

萩原 左人 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 教授

神谷 智昭 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 准教授

仲村 顕 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 共同研究員

○学術研究連絡会アドバイザー

久保田 裕道 東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長

田邊 元 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

園原 謙 沖縄県文化協会 事務局長

《参考》 調査実施に至るまでの経緯について

沖縄を発祥の地とする空手は、沖縄が世界に誇る伝統文化であり、先人達が体系化し今日まで受け継がれてきた技や精神性を今後も正しく保存・継承していくことが必要である。

ユネスコ無形文化遺産登録は、こうした貴重な伝統文化としての沖縄空手の価値を県民が再認識する契機となるとともに、国内外における「空手発祥の地・沖縄」の認知度向上に繋がることから、沖縄空手の振興はもとより、地域社会の発展や世界の平和文化創出に貢献するものと考えられている。

このため、県では、平成 30 年 3 月に策定した「沖縄空手振興ビジョン」において、沖縄空手の保存・継承に向けた取組の一つとして、ユネスコ無形文化遺産の登録を位置づけており、伝統文化としての空手の価値と平和の武である精神性の学術研究を深めるとともに、広く県民に啓発を行い、気運醸成を図ることとしている。

さらに、平成 31 年 3 月には、同ビジョンを実現するための具体的な工程等となる「沖縄空手振興ビジョンロードマップ」を策定しており、これらに基づいて登録に向けた取組を推進している。

県では、「沖縄空手振興ビジョン」及び同「ロードマップ」に基づき、空手関係者、学識経験者・有識者、行政関係者による「沖縄空手ユネスコ無形文化遺産登録推進検討委員会」及びその部会として流派別の空手関係者からなる「流派研究連絡会」を令和元年 9 月に設置し、登録に向けて必要な内容の検討に着手した。

また、令和 2 年 8 月には、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に必要な調査・研究並びに気運醸成に向けた取組を通じて、沖縄空手を次世代に正しく保存・継承するとともに、「空手発祥の地・沖縄」を国内外に広く発信することを目的に、「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会」を令和 2 年 8 月に設置し、早期の登録実現に向け、県内の空手関係団体をはじめ、県議会、市町村、教育、文化・学術、経済・観光、メディアなど幅広い関係者の参画を得た。

同協議会には、登録に必要な調査・研究を行うための部会として、空手関係者、学識経験者・有識者、行政関係者等で構成する「検討委員会」が設置され、沖縄空手は、「礼節を重んじ平和を尊ぶ精神性」や「地域社会・県民生活との密接な関わり持つこと」等を特徴とし、ユネスコの登録基準に示されている「口承の伝統・表現」、「社会的慣習・儀式・祭礼行事」、「芸能」等の分野に該当し、人々に伝統とアイデンティティを再認識させ、地域の絆や連帯を強める役割を果たす無形文化遺産である旨の検討結果が令和 2 年度末に取りまとめられた。

このような中、令和 3 年に行われた文化財保護法の改正により、これまで無形の文化財の対象としてこなかった生活文化の分野（書道、華道等）のうち、一定の学術的な蓄積により文化としての価値付けが可能なものについて、無形文化財及び無形の民俗文化財の登録制度が新設された。

沖縄空手が地域に根差し、人々の生活と密接に関連している特徴を裏付けるためには、空手や棒術など（武術的身体表現）が地域行事や祭礼行事などにおいて行われるなど、生活の一部となっていることを調査する必要がある。

このため、同協議会においては、令和 3 年 11 月に、これらの分野に精通する民俗学や人類学等の専門家による部会（「学術研究連絡会」）を新設し、新たな視点を盛り込みながら、早期の登録実現に向けた今後の調査・研究を実施することとなった。

5 調査票

(1) 基礎調査票

令和3年度沖縄空手ユネスコ登録推進事業

各市町村の「村棒」など「武術的身体表現」を有する基礎的調査票

各市町村で行われている「沖縄空手・古武道」関係（「村棒」や「棒踊」等を含む）など「武術的身体表現」を有する行事について、確認できる事柄についてご記載ください。

1.所在市町村		
2.豊年祭や綱引き、集落の祭禮、行事の中で、「村棒」、「棒踊」等がある村名をすべて記入してください。		
3.地域の中でももっとも伝統の古い集落名を記してください。		
4.村棒や棒踊等について（空手・古武術に関するエイサー等も含む）	名称：	
	起源：	
	概略：	
	特徴：	
	詳細内容：	
	継承状況：	
5.「市町村史」、「字史」、「郷友会誌」、その他文献資料や演武状況の写真などの有無と詳細	有・無	
	内容：	
6.学校等の地域社会の教育機関で導入されている事例があればご教示ください。	有・無	
	内容：	

(2) 調査票

沖縄空手ユネスコ登録推進事業

沖縄県内 市町村の各行政区（ムラ）所在の「武術的身体表現」を有する行事の調査票

市町村名	調査 年月日1		調査員 氏名			
			氏 名	生 年	電 話	住 所
行政区名				大正 ・ 昭和 年		
小字名 (地元での名称)	再調査 月日	令和 年 () 月 日 (曜日)	話者・協力者 氏名			
			氏 名	生 年	電 話	住 所
				大正 ・ 昭和 年 大正 ・ 昭和 年		

方言名称	1 年中行事名 (該当部分に「✓」)	☐ 豊年祭 () ☐ 盆行事 ☐ シヌグ・ウンジャミ ☐ その他 ()
	2 地元での呼び方	
武術的 身体表現の 形態	3 武術的身体操作・表現の形態	
	4 武術的身体操作・表現の分類 (該当部分に「✓」(複数可))	☐ 型の演武がある、 ☐ 対面での打ち合い等がある、 ☐ 獅子に対峙しての武術がある、 ☐ 芝居の中で武術的所作が演じられる、 ☐ その他 ()
時期・場所	5 行事が行われ期日 (旧暦)	
	6 上演の場所	
行事の目的 由 来 伝 承	7 行事の目的・伝播の仕方 (どのように伝承されるようになったか。)	
	8 中断・再興の時期とその理由	
	9 武術的身体表現(「空手」、「棒」等)に まつわる由来、伝承や民話、説話など	
当該行事 における意味	10 行事の中での演武(舞)の位置とその意味 (戦前、戦後、復帰後の変化)	
組 織 ・ 指 導 者 ・ 伝 承 方 法	11 組織	
	12 組織の特化	☐ 武術の部分に特化した組織がある(保存会設置) ☐ 武術の部分は専門の師匠がいる
	13 各組織の役割等 (戦前、戦後、復帰後等の変化についても)	
	14 指導者の氏名 (さかのぼるまで)	
	15 出演者の状況・条件 (年齢・性別/戦前・戦後・復帰後)	
稽古の 仕方、期間	16 稽古のスケジュール (戦前、戦後、復帰後等の変化についても)	
	17 稽古の場所 (戦前、戦後、復帰後等の変化についても)	
演舞(武)構成	18 演武(舞)構成(芸態) (現状を含む)	
	19 集落以外での披露の有無 (該当部分に「✓」)	☐ 集落のみでしか演武したことがない ☐ 集落以外(市町村内)で演武したことがある ☐ 公民館やホールなど(市町村外)で演武したことがある ☐ その他 ()
衣裳・道具	20 衣裳・道具の名称と着方	
	21 衣裳・棒、他の用具の管理と時代の変化について (戦前、戦後、復帰後等の変化について)	
	22 衣裳・棒、他の用具の修繕や製作、購入の方法 (担当、方法、経費など)	
	23 棒など用具の材質 (戦前、戦後の変化)	
音 楽	24 楽器の内容と呼称、各楽器の演奏者数と 時代の変化について(戦前、戦後、復帰後など)	
	25 楽曲 (戦前、戦後の変化)	
課 題	26 支援してもらいたいことや困っていること (今後の継承等課題等)	
	27 コロナで影響を受けたこと	
記 録	28 文献、映像記録、古老の記録、 プログラムや式次第など (該当部分に「✓」)	☐ 文 献 ☐ 映像記録 (浦添てだご祭に出演した記録が行政で保管している可能性あり、1992 首里城正殿復元の際の柿落し公演で戦後活躍された先輩方が演舞している) ☐ 古老の記録、メモ(昭和 55 年の浦添市史担当事務局編の「前田棒について」は前田出身の古老の記録) ☐ プログラムや式次第 ☐ その他 ()

6 調査結果総括

本調査で分かったこと（調査結果概要）

本調査においては、沖縄県域を5地区に区分して、空手や棒術など（武術的身体表現）を有する地域行事や祭礼行事等について調査を実施したところ、各地区や集落、また行事ごとに特徴があるものの、沖縄の地域社会や県民生活と密接な関わりがあることが示された。

今回の県内市町村教育委員会を通じた調査により、空手・古武道に由来する地域行事への伝承は、棒術が多く見られることが分かった。併せて、町道場の道場主への聞き取りを通じて、ムラ行事においては綱引きやハーリー（爬龍船競争）、豊年祭など、その行事における重要な役割として空手や棒術の演武が位置付けられているなど、沖縄空手が地域に根ざしていることが分かった。また、結婚式の余興として、沖縄空手の演武が選ばれることは、来賓者に沖縄空手の演武が喜ばれ、ハレの席にふさわしい演目として、沖縄空手が沖縄の人々の生活に浸透していることの表れである。さらに、礼儀作法の躰や生涯教育として、現在でも多くの道場が町中に看板を掲げ、地域社会に溶け込んでいることから裏付けられる。

本調査においては、各市町村を通じて行った集落単位の調査に基づき、必要に応じて実地調査やヒアリング等で補いながら、地区ごとの特徴や多様性についてまとめたものとなっている。

北部地区では、棒術において豊年祭を始めるに当たり、舞台や場を清める意味を持たせて棒を演じることが多く見られた。棒術の編成は、大きく3種類（一人棒、二人棒、三人棒）に分けられ、集団演武のスマチ棒などがある。演武形態では棒を激しく打ち合う事例も見られた。興味深いのは、本島最北端の集落（国頭村奥）において、王国末期に首里からの旧士族の移動に伴い空手や棒術の伝播・伝承が確認されたことである。沖縄空手は琉球古来の武術が周辺諸国との交流を深める中で体系化されたものがルーツとされるが、琉球王国時代に発展し、首里の士族等から地方へ伝播し、地域行事や祭礼行事へ溶け込み、伝承されていることが表れており、八重山などの他地区への伝播・伝承が見られた。

中部地区では、幅広い範囲で綱引きが行われており、併せて棒術も行われている集落が多いことが特徴である。五穀豊穰、子孫繁栄などを祈願して行う綱引きの前後に一人棒、二人棒、ハジリ棒と言われる組棒を演武する。また、綱引きに関わらず棒術が行われる集落も多い。豊年祭や旧盆行事、生年祝いや敬老会などの行事でも棒術の演武が披露される。エイサーのつなぎや組踊、舞踊と組み合わせで演武されることもある。

南部地区では、棒術を含む空手（武術的身体表現）は地区全体に広く伝播している一方で、今回の調査では存在が認められない地域や島がある。年中行事との関係では、綱引きや豊年祭において、空手や棒術などが披露されることが多い。南部地区の離島に目を向ければ、本島南部の集落とは異なる期日や行事において、空手や棒術が演武されているのが特徴である。芸能との組み合わせでは、獅子舞との組み合わせが目立っており、獅子舞の前に座清めで演武されることが多い。

宮古地区では、県内他地域と比べて伝承地の数が少なく、分布地域に偏り（宮古島南西部一帯と多良間島）が見られる。また、年中行事、特に豊年祭において棒術を行う事例が多く、宮古島南西部一帯では、棒術と女性の踊りがセットで行われ、最後にクイチャーを踊る。宮古島南西部では大人数で隊列を組むが、多良間島では二人一組である。使用する棒は短い棒と長い棒があり、特に宮古島南西部一帯では三尺前

後の短い棒を使用することが特徴である。

八重山地区では、祭事や民俗芸能は多種多彩で、島ごとの由来・来歴と歴史的な変遷も加わりながら様々な特徴がみられる。同一集落においても豊年祭や結願祭、節祭などの複数行事で棒術等が披露される事例も少なくない。また、由来や伝来の伝承では、沖縄本島からの伝来で広まったもの、八重山地区の他の島から広まった事例もあり、島への伝来のあり方として注目される。武術的身体表現の種類としては、棒術（型の演武と対面形式が主なタイプのほか、総巻きのタイプ）や綱引きでの型の演武や対面での打ち合い、フェーヌシマ（南又島）系統の棒と獅子舞などがある。

また、文字資料によって得られる情報の制約もあるが、近代の資料を通した歴史的事例（棒術或いは棒踊りに絞った地域行事）をまとめている。この中で、行事の場で供される棒術は、一つ目に純粋な武技としての棒術、二つ目に武技としての棒術を基盤としながら意図的に娯楽性を加えた棒術、三つ目に客体満足度を重視して創作された棒術に大別された。また事例を性質別に分類すると、ムラの祭祀行事では八月十五夜や葬送儀礼で用いる龕の修繕祝いなどで「棒踊」が披露されていたことが確認できた。その他には要人・賓客の来県にともなう接待行事、天長節の皇室関連行事、開校式や新校舎落成式などの学校行事、凱旋軍人歓迎会の行事などで棒術の披露が行われた。得られた事例のほぼ全てが祭祀やハレの席で、他者の鑑賞を前提とするもので、武術大会や実戦的事例は認められなかった。

なお、沖縄での空手や棒術などの武術的身体表現を考察する上で参考とするために、全国における民俗行事における武術的身体表現に関する歴史的変遷を紹介している。具体的には、武術は近世中頃からは広く世の中に定着し、実践する人々のあり方に合わせて拡張していき、民俗芸能として地域社会に定着している全国の事例を多く取り上げている。併せて、日本各地の武術的身体表現を伴う民俗芸能について、沖縄に多い「棒術」に絞って全国的な事例を紹介している。これらは、棒を呪具として用いる芸能、風流の道具として棒を用いる芸能、武術の披露として棒を用いる芸能、演劇的に棒を用いる芸能に分類されるが、2つ以上の要素を併せ持つ場合もある。

（学術的観点から）調査の総括について

沖縄では空手や棒術などの武術的身体表現がムラ（村落）の年中行事に多く取り入れられている。空手や棒術は「豊年祭」や「綱引き」、「八月十五夜」、「盆行事」、「種子取祭」、「結願祭」など重要な節目としての行事において披露され、その広がりや濃淡がみられるものの、沖縄本島北部から中・南部、本島の周辺離島、さらには宮古・八重山諸島まで及び、沖縄県内各地に分布していることが判明している。

空手は棒術ほど多くはないが、各地で祭事の演目として披露される。呼称も「空手」や「トーディ（唐手）」、「ティー（手）」として伝わり、「クーサンクー」など型の名称も流布している。注目されるのは「舞方（メーカタ）」として空手を舞踊化した演武があり、これは幕開けでおこなうことでその場の邪気を祓い清める意味とされている。

棒術については、「棒」や「棒術」、「棒踊」、「棒振り」、「棒合わせ」等の名称で広く伝承されている。地域ごとに伝わる技は基本の構えや型、組棒の構成など様々であるが、型の演武と対面での打ち合いが多くみられる。それらの名称も「一人棒」、「二人棒」、「三人棒」、「四人棒」など組み合わせの人数によるもの、棒術全員参加による「総巻」や「棒巻」、地名を冠した「津堅棒」、「座喜味棒」、「棒読谷山」、「泊根組棒」

等があり、さらには「フェーヌシマ（南ヌ島）」と称される独特な棒術が沖縄本島や八重山地区において傳承されている。演目の出る順番により、「ハタボー（旗棒）」、「メーボー（前棒）」、「ナカボー（中棒）」、「シーボー（後棒）」と呼び分けられ、棒術の難易度の高低を示したり、演武の所作による「トーヌギヤー（飛棒）」、「ヨコウチボー（横打棒）」など多様な展開がみられる。さらには本島南部では獅子舞との組み合わせもあり、沖縄空手の型を取り入れた獅子舞もある。

棒は一般的に三尺棒、六尺棒その他があり、素材は桜、チャーギ（いぬまき）、クルチ（黒木）などがある。演武の際に組み合わせて使用される武具には槍や長刀、刀、古武道の「トウフアー」や「ティンペー（盾）」ヌンチャク、また一般庶民が農具や漁具で用いるクワ（鍬）や鎌、櫂（エーク）などもみられる。

これらの空手や棒術は御嶽など神聖な場所において奉納演武として行われたり、舞台の清めとして最初に演じられたり、祭事の最後に演じられたりもする。全体として清めと祓いの意味づけがなされている。

このように空手や棒術など（武術的身体表現）は、地域の自治会や保存会、町道場などによって支えられつつ、地域の重要な年中行事で保存・継承されてきた。

以上のとおり、沖縄の伝統的な「空手・古武道」に由来する空手や棒術が、県内各地に普及しながら地域の年中行事に取り入れられてきた実態がある。これら民間に傳承された空手や棒術は、祭事における奉納や、舞台の最初や最後の祓いや清めの意味合いを持ちながら、必須の演目として位置づけられている特色を有している。